

# 世界情勢の変化（議論の叩き台（案））

## 論点

### グローバル化、IT化等

(1) 世界経済の人、物、金、情報、企業行動のグローバル化は、今後も進むのか。

それとも、金融危機を契機とした規制強化やアウトルキー（自給自足経済）を目指した動きが起こるのか。

(2) 製造業、サービス業それぞれにおけるITによる事業の置換えやITを利用した情報伝達の進展（マスコミや流通等における）は、これまで以上に進むのか。

(3) 「最後の消費者」であるアメリカ経済の停滞等により、「米中経済同盟」とも言われるアメリカが世界の輸出特に新興国からの輸出を引き受け、新興国や中東諸国などが米国に再投資する循環モデルは終わる又は衰退するのか。

(4) 知的労働（研究開発、医療、IT）のグローバル化、多国籍企業の研究開発の国際展開、合従連衡などのイノベーションのオープン化の動きもさらに進むのか。

(5) 物よりも知財や情報の価値が高まる知識経済化の動きは今後も進むのか。

## 想定される方向性

(1) 金融危機を契機にして一時的に

- ・保護貿易的傾向の高まり
- ・金融部門の規制強化、資金移動の停滞
- ・経済成長に占める輸出割合が多い国々における内需拡大を目指す動きの加速

が生じる可能性はあるものの、

長期的には、

- ・IT技術の進歩やインフラの整備が進むことによるIT化の進展
- ・IT化の進展、経済圏のグローバル化等による新規参入の激化、企業の世界展開、巨大化等による競争激化

の流れは止まらない。

(2) IT化の進展、国際競争の激化により、人材市場がさらにグローバル化するため、高度な研究、IT人材等の人材獲得競争が激化する。

多国籍企業による世界展開や競争の激化による選択と集中の加速により、製造のみならず、研究開発・イノベーションのオープン化も進展する。

(3) 新興国の台頭による製品の飽和等により、知識経済化のさらなる進行は止まらない。

## 論点

### 新興国等の成長

(1)「最後の消費者」であるアメリカ経済の停滞等により、BRICs諸国など新興国の成長は停滞するのか。

それとも長期的には成長していくのか。

(2)特に先進国への輸入、先進国からの投資に依存している中国の経済成長はどのようになるのか。その他のBRICs諸国や新興国等の経済はどのようになるのか。

### 資源等の高騰

(1)長期的には、原油などエネルギー資源、鉱物資源、穀物など食料品の需要増加や資源国の繁栄は続いていくのか。

(2)資源や環境制約が世界経済の成長の足かせとなっていくのか。

## 想定される方向性

(1) 短期的には先進国資金の引上げ、金融の混乱等はあるとしても、新興国における膨大な人口の増加、中産階級層の台頭が始まっていることから長期的には成長を続ける。

- ・中国：経済における輸出の割合が大きいこと等の問題  
→対策：内需拡大、「自主创新」の加速
- ・韓国：経済における輸出の割合が大きいこと等の問題  
→対策：コア部品、素材産業の国産化の加速
- ・インドシナ諸国：チャイナ+1の動きの加速
- ・インド：内需が大きいことから軽微な可能性
- ・ロシア：エネルギー価格の動向に左右  
→対策：モノカルチャー経済からの脱却を目指す

(1)新興国における長期的な経済成長、膨大な中産階級層の台頭が始まっていること等から、長期的には、資源等の需要増加は続く。

(2)資源や環境制約を打破する技術面のブレークスルーがなければ世界経済の持続的成長は不可能である。

論点

製造業におけるモジュール化、コモディティ化の進展

(1)自動車や精密機器をはじめとするすりあわせ型の製品を含め、今後もモジュール化の流れは止まらないのか。

(2)モジュール化した製品において、特に、組立て工程等のコモディティ化が起こり、日本企業の競争力は失われていくのか。

また、日本が基幹部品(中間財)や素材を製造し、中国等の新興国が組立てを行う東アジアの製造ネットワークは、今後とも維持されるのか。

(3)モジュール化した電機製品等の「世界の組立工場」として中国は発展してきたが、今後ともこの地位を維持するのか。それとも別の地域が浮上するのか。

(4)厳しい経済状況の中、基幹部品や素材(中間財)の製造で日本のライバルとなる地域が出現するのか、するとすればそれはどの地域か。

想定される方向性

(1)設計・製造等のIT化の進展などにより、長期的にはすりあわせ型の製品を含め、製品のモジュール化の動きは止まらない。

(2)過去の事例では、労賃の格差等からモジュール製品の国内生産は比較優位性がなく、日本企業のシェアも減少することが多い。

モジュール化による工程分離の進展などにより、コア技術、コア製造工程の国内維持を目指しつつ、製造のアジア等への展開は進む。

部品・素材などコア技術の保持、事業の戦略的な国際展開及びそれを可能とする技術経営力が重要となる。

(3)製造業においては安価で優秀な人材を有し、長い海岸線を持つベトナムなどインドシナ諸国や既に世界的企業を有するインドが台頭する。

(4)中国の自主创新、韓国の部品戦略等が進み、日本の産業集積に匹敵する中小企業群が育つことにより日本の地位を脅かす。

## 論点

### サービス経済化

世界経済のサービス経済化や製造業とサービス業の融合等は進んでいくのか。

### 世界の地政学的変化

今後の地政学的な変化の方向性。

- ・世界の政治的勢力地図は、どうなるのか。
- ・BRICs諸国は、世界のイノベーションセンターであるアメリカに匹敵する知的基盤を構築できるのか？

### 今後の成長セクター

金融業やITサービス業に代わり、どのようなセクターが今後の世界の特に先進国の成長セクターとなるのか。

### 国のモデルのあり方

冷戦後、急成長を遂げたBRICs諸国の他、アメリカやイギリス等の国々が栄えてきたが、今後はどのような国のモデルが繁栄するのか。

## 想定される方向性

- ・先進国においてもサービス業の成長率が他産業より高いこと
  - ・経済発展により新興国においてもサービス業の割合が増加すること
- 等から、世界経済のサービス化は、今後も進む。

このため、経済成長維持のためのサービスにおけるイノベーションやサービス部門の強化、国際展開が重要性を増す。

- ・多くの国際機関が、中国、インド等の台頭による多極化の進展を予想していること、
  - ・歴史的には中国、インドが世界経済の半分近くを占めていた時代が多かったこと
- に鑑みれば、多極化の流れは避けられない。

？

？